中学生の部

最優秀作　内閣総理大臣賞

福島県いわき市立小名浜第二中学校

三年　鈴木（すずき）　彩花（あやか）

家族でつなぐ交通安全の輪

ある日の夕方、私は自転車で家に帰る途中、信号が青に変わったので横断歩道に進もうとしました。そのとき、右から来た車が急にスピードを上げて曲がってきました。ブレーキを強くかけ、なんとか止まれましたが、もし一歩でも進んでいたらと思うと、背中が「ゾッ」としました。たった数秒の判断で、命が守れるかどうかが決まることを、身をもって感じた瞬間でした。

その数日後、学校で交通安全教室が行われました。映像では、反射材をつけた人とつけていない人の見え方の違いが映し出され、夜道では本当に姿が見えにくいことがわかりました。また、事故に遭った人の体験談を聞き、「自分は大丈夫」と思う油断が一番危険だと知りました。授業が終わる頃には、この学びを家族にも伝えたいという気持ちでいっぱいになっていました。

家に帰ってから、夕食の席でその日の授業のことを話しました。私の話を聞いた父は、「確かに車を運転していると、夜は歩行者が見えづらい」と言いました。母は「スマホを見ながら歩いたり、自転車に乗ったりする人も多いね」と心配そうに話しました。姉も「横断歩道では、車が完全に止まってから渡った方がいいよ」とアドバイスをくれました。家族みんなで意見を出し合い、私たちの交通安全ルールをつくることになりました。

まず、道路を渡るときは左右を二回ずつ見ること。そして、信号が青でも、車が止まったのを確認してから渡ること。自転車では必ずヘルメットをかぶり、夜はライトを早めにつけること。さらに、夜道では暗い服ではなく明るい色の服や反射材を身につけること。ルールはシンプルですが、どれも事故を防ぐために大切なことばかりです。

話し合い後、私たちはすぐに行動を始めました。父は自転車のライトをＬＥＤに交換し、母は買い物バッグに

反射材をつけました。姉たちは通勤用のバッグに光るキーホルダーをつけ、夜でも目立つようにしました。私は塾の帰り道に黄色い反射ベストを着るようになりました。最初は少し恥ずかしかったけれど、車のライトが当たるとしっかり反射しているのを見ると「これで自分の命を守れる」と思えるようになりました。

交通安全は、一人ひとりの意識と行動の積み重ねです。家族で話し合いをしたことで、私は「守られている」だけでなく「自分で守る」大切さを知りました。事故は予告なく訪れます。だからこそ、日ごろから安全を意識し、行動に移すことが必要です。

これからも家族とともに交通安全を心がけ、学校や友達にも学んだことを伝えていきたいです。そして、地域全体が安心で暮らせるよう、小さな輪を広げていくことが私の目標です。

優秀作　国務大臣・国家公安委員会委員長賞

愛媛県松山市立南中学校
一年　大脇（おおわき）　理緒（りお）

後悔の前にできること

私が小学年の時、祖父が交通事故にあった。母から事故のことを聞いた時、私がまず一番に考えたのは、祖父が今どこにいるのかということだ。私の心臓はドキドキし、不安と恐怖でたまらなかった。おそるおそる母にたずねると、

「じいじは、病院にいるよ。大丈夫。」

全身を強く打ったけれど、ヘルメットのおかげで助かったらしい。ヘルメットがなかったらと思うと、頭がまっ白になってしまった。

どのような事故だったかというと、信号のない交差点を自転車で直進していた祖父に、左から直進してきた車がぶつかったらしい。車が走行していた道路に一時停止の線があったにもかかわらず、車は一時停止しなかったため事故がおきたそうだ。私はその話を聞いて、疑問に思うことがあった。それは、車の運転手も自転車に乗っていた祖父も左右の確認をしなかったのか、ということだ。事故があった場所に連れて行ってもらったのだが、とても見晴らしのよい交差点だった。車も自転車もお互いに気付けたはずなのに。

防ぎようのない事故もあるかもしれないけれど、防げたはずの事故も多いのではないかと思う。今回の事故だって、車がきちんと一時停止し、左右の確認をしていれば、事故はおきていない。祖父が走行していた道路が優先道路だったとしても、速度をゆるめない車を確認できたなら、自分が止まれば助かっていた。もしかしたら、車が一時停止するはずだと、祖父は直進したのかもしれない。交通ルールを守るのは当然のことだけれど「だろう」「はずだ」そんな勝手な思い込みや決めつけが事故につながるのだと思う。「かもしれない」そんな気持ちをみんなが持てば、防げるはずの事故はゼロになるのではないだろうか。

この事故で、改めてヘルメットの大切さを感じている。祖父のヘルメットは割れて、自転車は曲がってしまったけれど、祖父は奇跡的に助かった。割れたのはヘルメットだったけど、もしかぶっていなければ、割れていたのは何だったのか。私は自転車に乗る時、ヘルメットをかぶってアゴひもをしめていないことがあったのを、深く反省している。正しくヘルメットを着用しなければ意味がないのだ。

命を守るために、できることはたくさんある。ヘルメットもそうだが、早めにライトをつけるようにしている。母と車に乗っていた時、無灯火の自転車や歩行者にはっとしたことがあり、自分の存在に気付いてもらうためにも、カバンには反射板のキーホルダーをつけて、早めのライトを心がけている。さらに、青信号で横断歩道を渡る時も、必ず左右の確認をしている。後悔をする前にできることはできる限り実行し続けたい。事故にあってからでは、取り返しがつかないのだから。

宮崎県延岡市立南浦中学校
学びの多様化学校分教室「熊野江教室」
二年　小田原（おだわら）　みろく

右、左、右っ!!

「右、左、右っ！よく見て、よし進め！」祖父と一緒に散歩する時に必ず言われた言葉だ。私が幼い頃から優しくて大好きな祖父とよく近所を散歩をした。いつも散歩する時は私の手を力強くギュッと握りしめていつもの優しい祖父の顔と違って真剣で少し怖いくらいの表情で歩く祖父との散歩は決して和やかな感じではなくどこかピリッとした緊張が漂っていた。特に横断歩道の前に来ると「右、左、右ッ！しっかり見て！」と大きな声で言われ、「手を上げて！」と手を上に引かれてしまう。そして大きなトラックが近くを通る度に痛いくらい私の手を握りしめて立ち止まってしまう。この祖父の行動が不思議で仕方なかった。

私が小学校高学年になると散歩する機会も減りたまに誘われても理由をつけては断っていた。そんなある日、

親に言われ嫌々ながらも久しぶりに一緒に散歩した時のこと、近所の横断歩道の前で「右、左、右ッ、しっかり見てね！」といつもの大きな声で言われ私は思わず「分かってる！大丈夫だから！」とつい言い返してしまった。祖父の顔を見るのも怖くて何も話さず二人で家に帰った。

そんな祖父が今年の四月に五年間の闘病の末亡くなった。日に日に弱くなって呼吸も難しい中、祖父が私に「みろくは良い子じゃ、また散歩しような」と私の手を弱々しい力で握りながら言った。「うん」と私は答えるのが精一杯だった。それが祖父との最期の会話になった。大きな悲しみの中、葬儀も終わり仏だんににっこり笑う祖父の写真が置かれた。その隣に小さな女の子の写真が並べられた。その写真の存在は以前から知っていたが気にも留めていなかった。思いきって父に尋ねてみると父の妹つまり祖父の長女和子さんの写真だと教えてくれた。和子さんは二才半の頃近所の横断歩道を歩行中に進入してきた大きなトラックの車輪に巻き込まれ亡くなったと和子さんの写真を見ながら父が話してくれた。その話を聞いたとたん、私の心の中で祖父のあの「右、左、右ッ！」という大きな声がよみ返り大きなトラックが近くを通る度に立ち止まっていた行動の意味が分かった気がして涙がポロポロと止まらなくなった。そして「じいちゃん、ごめんね」と写真の中で笑う祖父に心から謝った。なぜ祖父はその話を私にしてくれなかったのだろう。もしかすると、祖父の中で四十八年経っても和子さんの死を受け入れられずにいたのかもしれない。私と和子さんを重ね合わせていたのかもしれない。

「右、左、右ッ！よく見て！よし進め！」

祖父の声が私の中で響く。

「うん。気をつけるね、じいちゃん。大好きだよ、じいちゃん。」

埼玉県越谷市立南中学校

三年　金子（かねこ）　由奈（ゆな）

守りたいもの

私が学校から帰る途中、小さい子が横断歩道の無い道路を渡ろうとしていました。そこは車の通りが多く、一人で渡るにはとても危険なので、その子に話しかけました。「何しているの？ここは危ないからあっちの横断歩道渡ろうよ。」と私が言うと、その子はすぐに受け入れてくれました。渡ろうとしていた理由を聞いてみると「友達と会うために急いでいて、前にお母さんと一緒にあそこを渡ったことがあったから。」と言っていました。私は「急いでいてもこの道は車が多くて危ないから、こっちの横断歩道まで来た方がいいよ。」と伝えました。無事に横断歩道を渡り、別れる時には笑顔で手を振ってくれました。あの子は一番身近な母親と渡ったことがあるから、一人でも大丈夫だと思ったのでしょう。私も先生や両親、自分より年上の人がやっていたらやっていいものだと思うかもしれません。あの子が気付かずに渡っていたらどうなっていたか分かりません。子供は大人を見て学び、成長します。私達は小さな命、笑顔を守るために、自分達の行動一つ一つがお手本となるように責任を持たなければなりません。私はこの件をきっかけに交通ルールについてよく学ぼうと思いました。

私がすぐに思いつく交通ルールは「信号を守る」「ヘルメット着用」「ながら運転禁止」というものでしたが、調べてみると意外なものも多くありました。例えば「横断歩道で歩行者が待っていたらどんな理由でも車は譲らなければならない」というものです。歩行者側の私は横断歩道で待つ時、急いでない時は車に譲ることがあったが、運転手側に迷惑をかける可能性があったのだと気付きました。交通ルールには一つ一つ理由があり、その理由について一人一人が理解することでより多くの人が交通ルールを守れるようになるのではないかと思います。

今回考えたことを家族と共有しました。自分だけが気を付けていても他の人が気を付けていなければ意味ないという意見が出て、自分の身は自分で守る力も必要だと気付きました。私にもできることとして、道を渡る時には左右を確認し手を挙げる、夜や雨の日などの暗くなる

時には自転車のライトをつけるなどがあります。自分自身で事故を防止することは、事故を起こさずに済む相手のためにもなるので、相手への思いやりの心で取り組んでいきたいです。

今回、交通ルールについて自分で考え、家族で共有し話し合ったことで、より考えを深めることができました。これからも私は自分の行動に責任を持ち、お手本となるような行動をすることを心掛け、交通ルールをしっかり理解し、守っていきたいと思います。みんなが事故にあわず、笑顔でいられるような世界になることを願っています。

優秀作　文部科学大臣賞

埼玉県越谷市立北中学校

二年　岩舘（いわだて）　璃沙（りさ）

交通マナーの大切さ

私の家は道路をはさんで目の前に小学校の通用門があります。児童のみなさんが使う登校門は別の方向にあり、通用門のすぐそばの学校の敷地の中に学童保育所があります。私自身が卒業した母校であり、小学校四年生までお世話になった学童保育所です。

中学生になってから、学校からの下校時間に家の前の道路に何台も車がとまっているのをよくみかけるようになりました。家の前の道路は歩道のない道路なので、路上駐車している車がいると、それをよけて通り抜ける車がいるので、歩行者が車とぶつかりそうになっているところをみかけたことがあります。私自身も危ないと感じ

た経験があります。全ての道路に歩道があれば良いと思い、調べてみましたが、そのような道路を作るには広い土地と費用が必要で実現することは難しい状況のようです。家の前の道路には路側帯という白線で区別された部分もないので歩行者と運転者がそれぞれ気をつけるしかないと思いました。道路に何台も車がとまっていることを両親に話すと、学童保育所にお迎えに来る保護者の車が路上駐車しているのだとわかりました。

私が通っていた数年前までは車のお迎えは禁止されていました。私も学童に通っていたのでわかるのですが、お迎えは短い時間で終わるものではありません。親が迎えにきて教室に顔を見せてくれてから帰る支度を始めるし、その間に必ず学童の先生はその日の様子を親に話していました。トラブルがあったり、心配なことがあれば先生と親の話は長くなるし、帰り支度が遅い子もいます。その間ずっと車が路上駐車されているのだとしたら狭い道路で交通渋滞になってしまうのも想像できます。

兄や姉も一緒に路上駐車の状況を家族で情報共有しようということで話してみると、家族みんなが危険な場面を目にしていることに私はとてもおどろいてしまいました。

例えば、路上駐車の車列のすき間から子供が対向車線側に停車している自分の家の車にダッシュで飛び出してきていたり、車列から子供を乗せたと思われる車がいきおいよく飛び出して急な進路変更をしていることなどです。宅配便のトラックや福祉施設の送迎車もまきこまれてしまっているそうです。

家族で話したことを両親が学童保育所に路上駐車の対策をしてほしいと伝えに行くことにしました。その結果、次の週には学童保育所と市役所で対策をしてくれて、路上駐車禁止の看板を学校の門の所など数ヶ所に貼っていました。路上駐車の車も見かけなくなりホッとしています。

学童保育所の小学生たちはもちろん誰も交通事故にあってほしくはありません。車でお迎えに来る保護者の人にも事情があるのかもしれませんが、私たち子供は親の行動すべてから学んでいることを忘れないでほしいです。迷惑駐車になる場所を理解して一人ひとりが心がけることが大切だと思います。私も交通マナーの意識を高めて過ごしていきたいです。

佳作　警察庁交通局長賞

愛知県東栄町立東栄中学校
一年　伊藤（いとう）　新太（あらた）

お互いに気をつけないとね

僕の住む地域には日帰り温泉があります。この温泉は地元の人にも人気ですが、たくさんの観光客も訪れます。そして、そこの前の道路は通行量の多い道路で、僕の通学路です。

この温泉の道路に面している駐車場の出入口は、入口と出口に分けられています。このことは駐車場の案内、マナーやルールとして、地元民はわかっているのですが、観光客は看板や路面の表示に気づかず、出口と入口を間違えることがよくあります。

小学校五年生のときのことです。自転車に乗って先に行く友達を追いかけていた僕は、「プッ、プワー！」と突然大きなクラクションを鳴らされました。その車は温泉の入口から急に出てきたのです。僕は心臓がバクバクして体がふるえました。安全をよく確かめなかった自分もいけなかったけれど、僕は入口から出てくるなんてあり得ない、危ないじゃないかと思いました。

中学生になってからも、同じ場所で危険な目にあいました。部活動を終えて帰宅する途中のことでした。またもや入口から勢いよく出てきた車にはねられそうになったのです。疲れていて注意散漫になっていた僕自身も悪いけれど、入口から出てくるなんておかしいと腹立たしく思いました。

帰宅した僕は、このことを母に怒り気味の口調で話しました。母は穏やかに語りました。

「事故にならなくて、けがをしなくて、本当によかった。相手の人は観光客の人でしょう。温泉の出入口のマナーやルールもよく知らないだろうし、土地勘がなくて左右どちらに曲がろうか考えて集中力がなくなっていたかもね。道路を走っている車にだけ目が行って、通行人に気づかないこともあるのよ。お互いに気をつけないとね。」

僕は母の言葉を聞いてはっとしました。僕は出入口を

間違えた運転手の責任にばかり意識が向いていました。母の「お互いに気をつけないとね。」という言葉が心にすっと入ってきました。僕自身も安全に十分気をつけなければと強く思いました。それからの僕は、周囲の安全をよく見極め、運転手がこちらを目視しているかということなども確認して、落ち着いて安全に横切るようになりました。

僕の場合は幸い大事には至りませんでしたが、一つ間違えれば交通事故になって大けがをしていたかもしれません。事故の多くは、お互いの安全確認や心のゆとりで防げると僕は考えます。運転手は時間に余裕をもって安全運転に努め、土地勘のない地域では、より一層細心の注意を払うようにしてもらいたいと思います。そして、僕自身も慣れている道路であっても油断することなく、常に交通安全を心がけます。このようにして、交通事故の少ない安全な町、地元民だけでなく、観光客からも愛される町にしていきたいです。

愛媛県松山市立勝山中学校
一年　馬越（うまこし）　真那（まな）

いつか自分に返ってくる運転

「忙しいときほど、人に優しい運転をしなきゃね。いつか自分に返ってくるから。」

ある日、母のこの言葉が、私の心に深く残りました。私はその日、母と一緒に少し急いで目的地へ向かっていました。時計を見ると、予定にはあまり余裕がありません。ところが母は、横断歩道の手前で車を静かに停め、歩行者に「お先にどうぞ」と手で合図を送っていたのです。「どうして急いでいるのに停まるの」と私が尋ねると、母は笑顔でそう答えました。その瞬間、私はハッとし、何か大切なことを教わった気がしました。

毎朝、学校に向かう道で、私は歩道のすぐ横を車が勢いよく通り過ぎていくのを目にします。雨の日には水しぶきが上がることもあり、少し怖いと感じることもあります。「大人はみんな忙しいんだな」と思う一方で、横断歩道で私たちが渡り終えるまで笑顔で待ってくれるド

ライバーもいます。そのような人には自然と会釈やお礼をしたくなり、心が温かくなります。逆に、険しい顔で待つドライバーには、邪魔者扱いされたようで残念な気持ちになります。同じ「待つ」という行動でも、表情や心の余裕によって受け取る印象はまったく違うのだと気づきました。

最近のニュースで、私の住む愛媛県が人口十万人あたりの交通事故死者数二・四三人で全国ワーストになったことを知りました。とても残念で、悲しい現実です。原因は様々でしょうが、私の経験からは「時間や心に余裕のない運転」が事故を招く一因ではないかと感じます。ほんの数分の遅れを気にして焦るよりも、安全で思いやりのある運転を選ぶ方が、きっと多くの命を守るはずです。

私は中学生で、世の中を大きく変えるような力はありません。しかし、家族の中から始められることはたくさんあります。たとえば、父や母に送迎してもらう時は、余裕を持った出発時間をあらかじめ決め、それを守るようにしています。前日のうちに必要な荷物をそろえ、朝の支度をスムーズに済ませるのもその一つです。また、「安全で思いやりのある運転をしてね」と声をかけることも欠かしません。こうした小さな積み重ねが、家族の意識を少しずつ変えるきっかけになると信じています。

私自身も、横断歩道を渡る際には、止まってくれたドライバーに笑顔でお辞儀をします。ほんの数秒の行動ですが、相手の気持ちを和ませ、次も誰かに優しくしようという気持ちを生むかもしれません。そして、その優しさがまた別の人の安全運転につながり、やがて地域全体の交通安全の輪が広がることを願っています。

母の「いつか自分に返ってくる」という言葉を胸に、これからも時間と心に余裕を持ち、感謝を忘れずに過ごしていきたいと思います。

富山県高岡市立牧野中学校

一年　岡（おか）　志織（しおり）

交通事故から学んだこと

その日は、とても寒い日でした。いつも通っている大きな道で、右折の信号が青になるのを待っていました。青になったので母の運転する車がゆっくり曲がり始めました。そのとき、対向車が全く止まる気配もない様子で直進してきました。私と母の前にあるエアバックが飛び出すほどの、大きな衝撃がありました。

突然の出来事に、私も姉も何が起きたか分からなかったほどでした。この事故のせいで大きな道は一時通行止めになりました。寒い中で震えながらレッカー車が来るのを待ったり、警察の方と話をしたりしました。相手の方も、とても動揺しているようでした。

私は、毎朝、祖父母の家がある高岡市まで車で通っています。私の住む富山市から、車で四十分かかります。この生活は、姉が保育園に通い始めてから続いているので、今年で十五年になります。車を運転している母は、子供を乗せていることもあるので、安全にとても気を付けているそうです。それでも、大きな事故にあってしまったのです。

母がいつも安全運転をしてくれるので、私も姉も安心して過ごしていました。おしゃべりをしたり、時には眠ったり……。自分たちが事故にあうなんて、考えたこともありませんでした。でも、事故は起こったのです。私は、事故はいつ起こるか本当に分からないものだということを強く感じました。

今回の事故は、すべて相手の運転が原因で起こったことでした。けがもたいしたことはありませんでした。それでも、母は、

「大きなけがや、命を落とすようなことにならなくて、よかった……。」

と、今まで見たことがないくらいひどく落ち込んでいた顔が心に残っています。

今回は、被害者という立場でしたが、事故の加害者にもなる可能性があることを忘れてはいけません。相手の方は、二十代の女性の看護師でした。その日は、少し急いでいて信号が赤に変わったことに気付かずに、交差点

に入ってしまったそうです。私たちから見てもかわいそうになるくらいつらそうで今にも泣きだしそうな表情でした。そんな状態で警察の人や会社の人と話をしていました。何日かたってから、相手の女性は家族と一緒に私たちの家まで謝りに来られました。その後、母たちと話をしました。母は、

「今回は被害者だったけど、加害者にもなりうるよね。自転車に乗っていれば中学生も加害者になることもあるよ。気を付けようね。」

と言いました。

交通事故は、本当に他人事ではないということを肝に銘じたいと思います。歩いているときも、自転車に乗るときも、気を付けようと思います。交通事故などという怖い目に二度とあいたくありません。あの事故と事故から学んだことを忘れないでいきたいです。

栃木県星の杜中学校

二年　青木（あおき）　心音（ここね）

ルールを守る人を増やすために

私はとても臆病だ。よく言えば慎重だといえる。日頃からこの性格が災いして、何をするにも遅いと言われることが多い。

どれくらい臆病かというと…。信号のない横断歩道では、車が見えれば、絶対に渡れるであろう距離でも、怖くて渡らない。なのでせっかく横断歩道の前で車が止まってくれた時も、どうぞと身振りで伝えてしまうのだ。母と一緒に歩く時は、母が渡っても立ち止まってしまう。

「大丈夫だから、早く渡りなさい！」

と言われたり、場合によっては手を引かれたりすることもある。中学二年生にもなってと言われるかもしれないが、距離感がつかめないというのは本当に恐怖しかないのである。

それもこれも、世の中がたくさんの情報であふれているからだ。交通事故のニュースをよく見るが、子どもの

それは、自分が気を付けてもどうしようもないものばかりだ。そんなニュースを見るたびに怖くて仕方ない。

ある日、そんな私を見て、母が言った。

「いつも、車が止まってくれても渡らないでしょう？そこまでする必要ないと思うよ。」

必要ないとはどういうことか。車に先に通り過ぎてもらうのだから、むしろ安全なのではと思った。しかし、車を運転する母の意見は違った。ドライバーは渡る人がいれば止まって当たり前。だから止まってくれた時は素直に渡っていい。というものだった。それでも私は母の意見に賛同できなかった。なぜなら、皆が止まってくれるわけではないからだ。横断歩道の前で立っていても止まってくれない車の方が多い気さえする。そのことを母に意見すると、残念ながら現状では、止まってくれるドライバーばかりではない。しかし止まってくれる人は交通ルールを守れている人であり、一礼して横断することで、交通ルールを守る人を増やすことにつながるというのだ。納得できずにその時の話し合いは終わった。

ある日いつもの様に止まってくれた車に先に行ってもらおうと手振りをすると、再度渡るように手振りを返された。おそるおそる渡ってみると反対車線の車も止まってくれた。再び会釈をすると、ドライバーの方々は笑顔でうなずいてくれた。母の言葉に初めて納得した。私だけでなく、止まってくれた人たちも皆、気持ちがぴんとした気がしたからだ。このような気持ちの良い思いをすれば、交通ルールを守る気になるのではないか。

再度母と話した。車が止まった時は注意しつつ渡ることにしたと。お互いが気持ちよかったと。母は言った。感謝の気持ちや相手を思いやる気持ちが交通ルールを守ることにつながると。今では母の言葉の意味が分かる。何度も親子で話し合った「交通ルール」はほんの少しの感謝で、皆が気持ちよくなり、ルールを守る人を増やすことにつながることを実践していきたい。

宮城県仙台二華中学校

二年　高石（たかいし）　孝樹（こうじゅ）

ほんの少しの意識で

「ドン」という音が横から鳴ったとき、僕の体は地面に倒れていた。一回、ほんの一回でも確認していたならぶつからなかったのかもしれない。そう考えていると胸が痛くなった。

小学五年生の夏、その日は夏休み前最後の登校日だった。いつも通りの時間に起き、慣れた手つきで身支度を整えていた。いつもと違うところをあげるなら、四時間授業が終わった後に友達の家で一緒に遊ぶ約束をしていた。そして、これからしばらくの間、毎日のように会えなくなるクラスメイトと話す最後の一日だった。慣れた手つきで整えているように見えて、内心ワクワクしていた。

「今日はいつもより早く行こう。」

僕は急ぎ足で家を出た。僕の家は、通路から道に出るときに、両側に石垣があるため、見晴らしが悪く、注意してから行かなければ危なかった。だが、注意力よりも気持ちの高揚の方が高まり、右も左も確認せずに僕は飛び出した。そのときだった。自分の真横からした強い音がきこえたときには、その場に倒れていた。自転車とぶつかった。あまりの出来事に声が出なかった。どうして周りを確認しなかった。確認していたらこんなことは起きなかった。そう考えていると全身の痛みよりも自分の不注意に胸が痛くなった。起き上がったときにはすでに運転者は去っていた。

学校が終わり家に着いた。そのときにはほとんど治っていたが、念のため友達との遊びを断り、家で安静にしていた。帰ってきてすぐ、母に今朝あった出来事を伝えた。母は非常に驚き、少し悲しい顔をした。夏休みのしおりに書かれていた「夏休み中はケガなく、事故なく生活しよう」という言葉を思い出した。今後も残る大きなけがや命にかかわることが起きていたかもしれなかったのだと思うと、自分の不注意で周りの人を心配させてしまったと反省した。

その夜、家族全員が揃ったころに「この家の交通安全のルールを家族全員で話しあいたい。」と言った。自分

の身にあったこと、それから考えたことを真剣に伝えると全員がやる気になって協力してくれた。全員で意見を出しあい、僕の家での交通安全ルールとして、「ヨナトミカ」という標語を作った。ヨは、よそ見をしない。ナは、何度も。トは、止まる。ミは、目で見る。カは、もう一度確認する。これは被害者側も加害者側もどちらも必要なことだ。当たり前のことだが、欠けてしまうと事故につながる恐れがある。ルールの重要性を深く感じた。

交通安全ルールは事故を防ぐうえで大切なことである。しかし、事故をなくすには一人だけが守るのでなく、全員が守らなければ成立しない。どちらかが守っていても、もう一方がないがしろになっていると事故が起きてしまう。あのときは注意が足りなく、事故につながってしまった。歩行者も運転者も注意をする。ほんの少しでもお互いが意識するだけで事故は減らせる。このほんの少しの意識が広がり、社会が安心安全に生活できることを心から願う。

兵庫県神戸市立御影中学校
三年　新美（にいみ）　りを

笑顔の未来へ　やさしく運転を

中学生になって助手席に座ることを両親から許されるようになると、車内から見える景色が変わった。目の前の横断歩道をお母さんと手を繋ぎぴょんぴょん飛び跳ねながら渡る子。片手をピンと上げて渡る子。その可愛さに笑みがこぼれてしまう。横断歩道での幼い日の私も、車に乗る大人たちの目にはこんな風に映っていたのだろうか。

この夏、私は二週間で二度も交通事故を目撃した。一件は自動車と自動車、もう一件は自動車とバイクの衝突事故だった。いずれも歩行者は巻き込まれなかったが、目のあたりにした光景がショックで食欲がなくなったし、あの時の大きな衝突音がしばらく耳から離れなかった。交通事故は、当事者やその家族・友人はもちろんだけれど、目撃者の心をも大きく傷つけるのだと知った夏だった。

どうして交通事故が起こってしまうのか、運転免許を持っている大人に聞いてみたら、みな「運転中に病気の発作等で不運にも事故が起きてしまうこともあるけれど、多くの場合、ほんの一瞬の気の緩みが原因なのではないかな」と言う。ならば技術に期待するしかないのかもしれない。いずれすべての車が完全自動運転になる日が来ると言われているが、「運転者状態検知センサー」のようなものも開発してはどうか。運転中に眠気が襲ってくることだって、疲労困憊の時だってあるだろう。センサーで運転者の疲労・睡魔・イライラを検知したら、車両をゆっくり停止させて運転を継続できない状態にし、おすすめのリラックスミュージックを自動的に流すなど、運転者の状態を客観的に判断し早めに運転を停止させる機能が車にあったら、「自分は現在運転には不適切な状態である」という自覚がない運転者に休息を促せるのではないか。

また、運転免許証をスキャンしないとエンジンがかからないようにした上で、急加速や急減速、スマホ使用等を含めた運転中の道路交通法遵守状況を車が検知・記録し、減点する制度にしたらどうだろうか。高い点を維持している人にはガソリン代や駐車場代が値引きになる等メリットがあり、減点が多い人には罰金や研修を義務付けたら、みな、今よりも注意深く運転するのではないだろうか。

とはいえ、プライバシーの問題や駐停車増加による道路の混乱等の問題を考えると、これらの案は現実的ではないだろう。期待を込めたアイデアは尽きないが、交通事故の悲惨さを伝え、標識などで運転者に注意喚起を促していく地道な積み重ねこそが、現段階においては交通事故を減らすための最善策だと思う。テクノロジーは現在進行形で進歩しているが、今この瞬間も日本全国で横断歩道を楽しそうに渡っているであろう何千何万の子どもたちの笑顔を守るのは、ほかでもない、運転者一人ひとりの「心」なのだ。

「お母さんが小さいときは、交通事故がたくさんあったのよ。」

私が想像する未来、横断歩道を楽しそうに渡るわが子に私はこう話している。それを聞いた子どもはこう言うだろう。

「でも今は、車も人もみんなニコニコだね。」

神奈川県川崎市立中野島中学校

三年　吉田（よしだ）　爽帆（さほ）

合言葉は「左右オーライ」

「これを見ると元気がわくのよ。」と言う母の視線の先には、母を元気づけようと歌って踊っている幼い私たち姉妹と足がギブスで固定された母の姿がありました。母がバイクを運転中に事故にあい、手術した時のことです。「消防署の前で事故にあったから、救急車を呼ばなくても来たのよ。」と笑って話す母の足元をふと見ると、その時の傷が今でも痛々しく残っていて、胸が締めつけられます。傷の部分を机にぶつけた時にはとても痛がり、「他の所より痛みを感じやすいの。」と顔をしかめる母を見て、私もさすってあげたものでした。

小学六年生の時、私も自転車事故にあいました。横断歩道を青信号で渡っていた際、信号無視をしてきた自転車とぶつかりました。けがは大したことなく、不幸中の幸いでしたが、自転車の前輪が曲がってしまい、動かなくなりました。あっという間に自転車が壊れてしまう衝撃に、とても怖く感じました。交通事故はニュースの中の出来事だと思っていたのに、自分も当事者となり、あぜんとしました。思い返してみると、警察署の前にある交通事故数を表す表示板にも毎日数件起きていることが示されていました。自分もまたいつか被害者、もしかしたら加害者にもなってしまうかもしれないと思い、ぞっとしました。

私と母の事故の体験から、交通ルールを守っているだけでは事故は防げないとわかりました。私の事故は、青信号だったので、左右の確認をよくしなかったことも要因の一つだと思います。小学校の時の交通安全教室で、青信号になってもすぐに渡らず、左右の確認をすることが大切という教えがあったことの意味を痛感しました。母が運転する車に父が助手席で同乗していると、交差点でよく、「左オーライ」と言います。どうせ母も確認するからむだだなと思ったのですが、「お母さんからは見えない部分があるし、たくさんの目で見た方が安全だからね。」と父は満足気に話しました。運転席からは見えない死角があることを知り、私も「死角減らし大作戦」を決行することにしました。車に同乗する時は、交差点

や発進する際、私も一緒に安全確認をし、「左オーライ」や、「自転車がきているよ。」などと、母に伝えます。やっていくうちに、なんだか私も運転手になった気分で、視野が広くなり、今まで気にならなかったことが気になるようになりました。自転車が後ろを確認せずに急に横断してくること、道路に駐車している車の前から人が飛び出すこと、バイクが車の横をすり抜けることなど、気を配っていても見逃しそうなことがたくさんありました。「運転は片足しか使わないから体は楽だけど、神経は疲れるのよ。」と話す母の気持ちが少しだけわかりました。

一番大切なことは、左右の確認。自分が歩行者の時はもちろん、同乗している時も一緒に確認します。合言葉は「左右オーライ」。左右の安全確認をし、警察署前の表示板に交通事故数ゼロが並びますように。